

白芙蓉

(島津義久、義弘の母)

迎春

永正十一年甲戌（1514）の元日の朝は大層冷え込んだ。立春頃とはいえ南国の卯の刻（午前六時）はまだ暗い。板戸を開けると、あたり一面うっすらと粉を篩ったような雪で覆われていた。数え年五十四才を迎えた清色城主十一代入来院重聡は、身仕舞いを済ますと外に出た。石段の下には、すでに甥の重貞と近習二名が馬の用意をして待っていた。人も馬も吐く息は白い。一同はひらりと跨がると重聡を先頭に馬を駆って、例年通り、宗廟大宮神社に初詣を行った。大宮神社は、重聡自らが城の南東二キロメートルほどの牟多田の地に社殿を建立して、水害の多かった久木塚より遷座したものであった。建立時に植えた三十一本の杉も、この十余年ほどの間にしっかりと育ち、神社らしい空間を醸しだしている。参拝を終えて鳥居をくぐって通りに出ると、城主の参拝の時を見計らっていた家臣や領民が続々と参詣に訪れ始めている。

「おう」

と声をかけると重聡は再び馬に跨がり、鞭を当てた。取って返して、城を挟んで反対の方角、北西にある武神、諏訪神社にこの年の戦勝を祈願するためである。

清色城のある入来の庄は、鹿児島市より北に40キロメートル、南の郡山とは八重山の山系にある入来峠で隔たれ、北は山崎峠と川内川、東は愛宕山系、西も八重山系に囲まれていて、八重山の豊かな樹林群より流れ出ている清流、清色川を堀のように巡らせた要害の地である。この地は、開けた平野はないものの水の利がよく、シラスの南薩とは違って稲作が可能であった。山林には、猪や鹿、狸、狐、兔など現今でも棲息しているが、川の鮎や鰻、蟹、海老などとともに、当時の村人の食卓を賑わせていた。戦による略奪や踏み荒らされることさえなければ、風光明媚な幸多い村である。

宝治二年（1248）相模の豪族渋谷光重は、北薩に地頭の職を得て、次男以下の男子五人を関東から下向させた。鎌倉幕府創始のころの豪族は、執権北条氏に次々と滅ぼされていたことから、下向は渋谷光重の己が家系を護るための方策であった。彼らはその居住地によってそれぞれ東郷・祁答院・鶴田・入来院・高城を名乗った。のいわゆる渋谷五族である。以後百五十年間は、紆余曲折はあったものの、結束して難しい局面を乗り越えて来た。戦に強い彼らは、また山北の五族とも呼ばれ、恐れられていたのであった。

しかし時はあたかも下克上の真っ只中、室町末期である。応仁の乱より五十年になんなんとしていたが、止まるところを知らぬ混乱が続いていた。関東では一介の伊勢長氏が、伊豆を手中にして北条早雲を名乗り、小田原城に拠って相模の三浦を滅ぼしつつあった。都は徳政令一揆や土

一揆が頻発し、昨年ついに將軍足利義植は近江に逃げだしていた。九州も守護・地頭が領家の地を奪い、土着の豪族とともに割拠して相争い、淘汰しては戦国大名への道を競っていた。

北薩で力を持っていた渋谷氏であったが、奥州家、總州家、薩州家などに分岐した守護島津氏の抗争に巻き込まれ、分断されてしまった。すでに鶴田は領地を失い、高城も東郷の一族が抑えて高城を名乗っていた。

入来院氏は百年ほど前の八代の守護島津久豊のときから、奥州島津に協力していた。四十年ほど前の重聡の元服に加冠したのは、十代の守護立久であった。重聡は沈着、温厚で人望もあり、着実に勢力を伸ばしていた。二十五年前の父重豊からの譲状によれば、すでに入来院清色の土地の他に、西は川内地方に相当の土地を有し、南は始良平松を所有しているとある。

十一代守護職島津忠昌が、相次ぐ膝下の豪族の反乱に、失意のうちに四十六才で自刃したのは六年前のことである。十九才で父の守護職を継いだ忠治は、この年二十五才になったが、まだ力は弱く、渋谷氏の中でも衆望のあった入来院重聡を頼みにしていた。彼は守護職に就いた翌年に重聡に感謝状を送り信頼の情を述べていた。そして四年前には川内の隈之城を重聡に贈っている。

八方睨み合いの中ながら、この二三年は大きな戦はなく、清色の里も年貢の収納もつつがなく終わっていた。重聡は、朝日に霜柱が燦めく道を駆け戻ると、城郭の南西にある屋敷神、東北の水神に洗米と御神酒を供え柏手を打ち、中に入った。表の間には、正月の膳が整えられていた。

重聡の妻の光はまさに臨月である。例年は自ら汲んでいた若水も、今年は光の幼時からの侍女夏に任せ、その背後から白む東に手を合わせた。厨ではその若水で雑煮のつゆを作る。それは年賀に登城してくる家臣にも振る舞わねばならない。いつもより念を入れて身仕舞いをした光は、ゆっくりとした足取りで厨へ出向き、下男下女をねぎらって、料理の味も吟味し、配膳の指図をするのだった。

当時は、城主と言っても豪族であり、戦乱の世のこととて生活は全て簡素なものであった。しかし行事は格式を以て行われる。重聡が表の間に入ると、小さな袴を着けた数え年四才の千寿丸が走り寄って来る。その頭を撫でながら、正面に重聡が着座すると、庭に面した右側に、嫡子千寿丸、次いで今は庶流の兄となった十九才の甥の重貞が着座する。重聡の左側に光が座った。

三十分ほど前には隣の市比野城にいる側室の豊が三才の珠を連れて登城しいて、奥で身繕いをしていた。元気な豊は何時ものように一里（4キロメートル）ほどの道をスタスタ歩いて来たのだ。屈強の若者萩原正聡に背負われ、馬上に揺られて行く珠の後を追いながら。

珠と豊が光の下手の座に着くと、居合わせた萩原正聡、近習も重貞の下座に連なって座った。

全員に雑煮の椀が運ばれ、重聡はにこやかに、

「よい年明けじゃ、皆若うなったようじゃのう。今年も力を合わせ、
尽くせよ」

と挨拶すると、一同も「お若くなりましたようで」と新年の挨拶をした。今ではあまり聞かれないが、「若ウオナイヤシツロ」はこの地方の「おめでとう」である。まずは若水の雑煮を頂く。侍女が重聡の盃を満たすと、重聡は盃を目の前に掲げ、

「無病息災、五穀豊作、味方必勝を祈願する」

と言って一気に飲み干した。盃は順次とりかわされる。小一時間ほどの会食が済むと、一同は退出し、表の間は年始の家臣たちの挨拶を受けるために、手早くとり片付けられた。光は千寿丸を伴って、南西にある奥の間に下がり、豊も珠と共に従った。光の居間の表の間は八畳で、重聡の心尽くしの七島蘭の畳が敷きつめられていた。控えの八畳の間は当時の一般の部屋のように板敷きのままで、二枚の厚手のござが敷かれてあった。光は群青のぼかし染の絹の打ち掛けを脱ぎ夏に手渡すと、苗色の小袖姿になって、大振りの座布団の上にゆったりと座った。豊は改めて敷居に手をつき、

「奥方様、今年もよろしうお願い申します」

と珠を傍らに挨拶をした。

「はい、今年もよろしゅうに願います。さあご挨拶はそれまで。こちらにお入りなさいよ」

光は手招いて招じいれると、千寿丸と珠に外で遊んで来るようにと言った。待ちかねたように千寿丸は、まだ歩くのもおぼつかない珠の手を引いて駆けだした。火桶の火をかき立てていた夏はあわてて後を追った。

光は二十六才を迎えていた。ふっくらと白い頬、切れ長の目にやさしい鼻をして、ふくよかな唇、黒く長い髪と、珍しいほどの美女である。八年前重聡は、次女菊を東郷家十一代重信の嫡男重朗のもとに嫁がせたが、その折り接待に出ていた光を見初めた。光は東郷氏の一族白浜加賀守重香の娘である。重聡の正室は、娘二人を残して十六年前に亡くなっていた。重聡は、十年ほど前から家臣の娘豊に身の回りの世話をさせていた。嫡男がいなかったため、甥の高城重貞を養子として迎えていて、それまでは正室を迎える気は毛頭無かったのだ。高城重貞は同じ渋谷の一族の東郷重隆に嫁いだ重聡の妹の次男で、そのころ重隆は兄の当主東郷重信の命により高城家を継いで、高城を名乗っていた。

重聡のたつての願いを、白浜加賀守は喜んで受けた。娘が、渋谷氏の中で今一番の勢力のある城主であり、人望もある重聡の妻となるということは願ってもないことであった。父親っ子でもあった光も、相手が父と同じ位の年齢ではあったが、日焼けした逞しい重聡の思慮深そうな面立ちに、頼もしい人だと好感を持った。そして光の天性ののびやかで鷹揚な気性が、問題をすらすらと運ばせた。輿入れと同時に豊は市比野城

に移された。

豊は小麦色の肌をした、すらりと引き締まった体形で、敏捷であった。やや濃い眉の下にはつぶらな眼があって、ほっそりした鼻、唇も薄めで、光とはまた違った魅力があった体を動かすことが苦でない彼女は、暇があれば甲斐甲斐しく立ち働くのだった。そして三つ年下の美しい奥方に深く憧憬の念を抱いていて、折りあらば珠を連れて登城しては、光の世話をしたり、話し相手になっていた。

「おめでたも、そろそろでございますね。大儀でございます。お横におなりなさいませ。おみ足をお摩りしましょう」

豊は布団を取り出して、光の脇にあてがい、腰から下をゆっくり摩った。

「ありがとう。今でこそ早く身二つになりたいと思うのだけれど、生まれてしまえば、もっと気掛かりのことばかりで、お腹に入れている時の方がよかったと思うのよね」

「さようでございますね。冬はお風邪にはご注意くださいと。この寒い時もなんですが、珠様のように土用というのも大変でございました。千寿丸様は弥生のお花の頃でございましたねえ」

「そうそう。床上げをして外に出たら、一面萌え立つ緑の世界で驚いたものよ。半月の間に世の中生まれ変わったような感じだったわ。また当分はお屋形様をよろしくね」

光にしても多少は複雑な思いがない訳ではない。豊が珠を身ごもったのは、千寿丸の誕生前後のことであった。だが、ひょっとしたらお屋形様より自分の方を大切に思っているのではないかと思う程、一生懸命自分に尽くしてくれる豊に、光は以前からすっかり心を開いていた。この二ヶ月ほど家臣の前に出ることを控えている光は、しばらく豊と女の世間話に花をさかせるのだった。

雪の誕生

光が女兒を出産したのは、五日の早朝であった。産気づいてから四時間ほどの出産であった。光は初産の千寿丸のとき十五時間も苦しんだことを思い、安産という表現を納得するのだった。産婆として来ていた女二人が退出し、夏がこまめに片付けて、光も少しの間まどろんだ。三時間ほどして重聡が見舞った。

「おう、無事な出産何よりじゃ。うむ。髪も黒いし色白さんで、お前のような美女になるぞ。楽しみじゃのう。今日は珍しいほど雪が降っておる。お雪と名付けよう。ゆっくり養生しなされよ。春も近いことじゃが、特に今年は寒いでのう」

光の脇に腰を下ろした重聡は、白い産着に包まれすっかり眼をつぶって眠っている赤子の髪を人指し指でそっと撫でながら言った。

重聡は、五年前に自分の墓碑を建てた。恋慕した人も手に入れ、もう

思い残すことはない。戦では、死を厭わず潔く戦おう。後顧の憂いなく名を残すことも光への贈り物だと思った。「逆修（ぎゃくしゅ）」と言って生前に自分の死後の供養をすることは、この時代よく行われたことである。往時の入来院家の逆修墓は、今でも「いくさ墓」として入来院に現存し、明日をも知れぬ戦国の世の武士の心意気を伝えている。

しかしその翌年の春、光は嫡男千寿丸を産んだ。これは五十才の重聡を手放しに喜ばせた。二十年振りのおめでたであり、初めての男児であった。嫡子誕生となれば、養子にしていた甥の重貞の処遇が問題となる。重聡は、重貞に庶流の長子として十五町歩の田畑を与え、引き続き手元におくことにしたのだった。その後続いて豊に珠が生まれ、今また正室光に雪の誕生である。孫のようなこの三人のためにも、安定した領地の経営と、周囲の豪族との連帯に努めねばならない。これは長生きせねばならないなあと重聡は密かに思うのだった。

雪の乳母は、木場重春の娘久と決まった。前年、生後三カ月の男子を亡くし実家に戻ったままで、溢れ出る乳を泣きながら搾っていた久は、毎朝近くにある温泉を浴びて登城して来た。お乳の出は一寸した緊張にも出なくなるデリケートなものである。まだ産褥にいる光には久の存在は大変心強い。

午後の日差しが障子を染める頃、久と夏は雪に産湯を使わせる。板の間にごさを広げ、湯の入った盥を運ばせる。肘で湯の温度をみるのは、久であった。久の指示通り湯と水のやかんを交互に注ぐ役目は夏である。床から起きて光は、雪の着物を脱がせ、肌着を胸に逆さに掛けて、合図を待って久に渡すのだった。肌着を掛けておくのは、赤子が手足を動かし宙を切ることに怯えるからである。久はムチムチと太った雪の手足のくびれを、柔らかな布で洗い、くるりと返して自分の手首を雪の顎にあてがうと、するすると肌着を脱がせるのだった。晒の布を両手に上がってくる雪を待ち受けているのは夏である。こうして女三人とも雪のえも言われぬ柔らかな肌の感触を楽しむのだった。

「やはり女の子は違うわ。こうして抱いてみるとこの辺がふっくらと柔らかいでしょ。千寿丸はずっしりとしていたけれど、本当にお雪は軽くて柔らかいわ」

光は、雪を抱きしめてその腰のあたりに手を当て、軽く叩きながら言った。

夜は、光が授乳するのだが、昼間存分に二人の乳を堪能している雪は、むずかることもなくよく眠った。重聡も、昼は表の間に出て、殆どの時間を軍議や訴訟などに費やしているが、夕餉は、来客や祝宴の無いかぎり、光や千寿丸と水入らずで取るのが常であった。そして日に日に可愛く育つ雪を膝に乗せ、相合を崩して、自分も子供に帰ったようにあやすのだった。

「ああ、いい子じゃ、いい子じゃ」

重聡が自分の指を雪に握らせ、軽く揺ると、千寿丸も覗き込んで、お餅のようなその手の甲にそっと触れてみるのだった。

傍らの光は、おおどかにこの団欒を楽しみながら、鬢に白いものが増えてきた重聡を見て、ただこの平和のいつまでも続くことを祈らずにはいられないのだった。

この年の五月五日、雪の運命の人、島津貴久が、田布施亀ヶ城に呱呱の声を上げた。

悲劇の幕開け

年月は瞬く間に過ぎて行く。しかし守護の島津忠治は未だに力が弱く、領内には国一揆が続発するなど不穏な状態が続いていた。

永正十二年（1515）、忠治の本拠鹿児島のすぐ隣、薩州吉田の吉田位清（のりきよ）が兵を起こした。大守の足元の反乱である。流石に忠治も腹に据えかねて、自ら陣頭に立って出撃した。しかし思いのほかの抵抗であった。加えて南国の真夏の炎暑が病弱な忠治には耐えられず、はかなくも忠治は陣中に病没したのだった。

島津忠治には子がなかったので、弟の忠隆が十三代の守護職を継いだ。まだ十七才である。忠隆は、兄の遺志を継いで懸命に吉田位清の討伐に力を注いだ結果、何とか平定することが出来た。しかし不穏な情勢は少しも変わらず、忠隆は周囲の豪族に対して疑心暗鬼の状態であった。

入来院重聡は、無用の争いを避け、自分の領地の力を貯めることに努めていた。あちこちからの援助の要請も可能な限り無視した。尻馬に乗って多少の領地を掠めたとしても、いずれは報復があり、大きな目で見れば決して徳にはならないことを知っていた。何よりも渋谷一族の連携を保つ気配りを怠らなかった。そして領民が豊かになり無理なく年貢を徴収出来ることが、本当の自分の力になるのだと認識して、天候や作物の出来、不出来にも注意していた。彼は家臣たちにも、農民を日頃から大切にしていし信頼を得て、いろいろな情報や協力を得られるようにしておくよう心掛けることを説くのだった。

永正十六年（1519）の旧暦四月、野は若草の新緑に覆われ、城のあちこちに植えられた桜も既に葉桜の時期を過ぎていた。清色川の対岸には、入来院家の菩提寺寿昌寺があって、その山門から川添いは桜並木である。城壁から見下ろせば、南斜面の寿昌寺の桜の若葉や清色川のゆるやかな流れが、午後の日を浴びてきらきらと輝いていた。

千寿丸は九才、雪は五才になっていた。千寿丸は母に似た切れ長の眼も凛々しい賢そうな少年である。彼は毎朝、漢籍の講義を岡本伊予守重樹に受けていた。岡本家は二代入来院明重の六男から出て重樹は九代目である。今朝は「史記」の「項羽本紀第七」。重樹のお得意のくだりとて、調子よく読む声にも力

が入る。千寿丸も目を皿のようにして本を見つめ、復唱するのだった。

いっときの手習いのあとは、義兄の重貞による武芸の稽古である。重貞の伯父の重信は犬追物の名手でその名は、遠く大守にも聞こえていたし、父の重隆、兄の重誠も豪のものとして知られていた。千寿丸は弓と槍、それに今年からは夕方の馬術も加わっての稽古が日課とされていた。弓は四ツ矢を五回の二十本以上ということになっているが、千寿丸は弓が得意で、自ら六回、七回を行う日もあった。しかしそれも昼前には終わる。

雪は夏に髪を櫛けずってもらった後、しばらくは夏に遊びの相手をしてもらう。夏は昔話の語りが上手なのだが、それは寝るときのお楽しみだった。重聡や子供たちの身の回りの世話をすませた光は、三十分ほど雪にお伽草紙など読んでやるよう努めていた。雪は、母が夏と雑事の打合せや、読書を始めると、暫くは一人遊びをしているのだが、いつかそっと兄の勉強や槍の稽古を見に行くのだった。

雪の目にも千寿丸は美しく凛々しく見え、憧れの眼で見上げるのだった。午後になると二人はよく連れ立って遊んだ。おやつまでの二時間半ほどが千寿丸に与えられた自由時間である。おやつの後には馬術の練習や遠出が待っている。

雪は母のように色白で、父ゆずりのはっきりした二重瞼の円らな目をしていた。小さく豊かな血色のよい唇。千寿丸もこの人形のように可愛い快活な妹を宝物のように大切にするのだった。

ひとしきり城内の庭を駆けめぐって遊んだあとは、藤棚の下に腰を下ろす。二人の好きなこの藤棚は、冬は冬枯れの陽射しを通し、夏は涼しい木陰となる。そして今は爛漫の花盛り。手を伸ばせば触れるほどに薄紫の花房が、波打つように下がっていた。

柔らかいその土の上に、千寿丸は棒切れで動物や平仮名をよく書いてやるのだった。雪は字よりも絵の方が好きだ。

「ねえ、兄様。蟹を描いて下さいな。お猿もね」

「ねえ、兄様。次郎太が獲った狸にして下さいな。次郎太は雪に見せてくれないの」

千寿丸はなるべく雪の希望にそうように書くのだが、猿も狸も大して変わらない。しかし雪には、兄が描くものどれもが素晴らしく思える。雪はただ兄が自分の頼みを聞いてくれるということだけでも十分満足なのだから。

遠くから蹄の音が聞こえる。二人が立ち上がって城壁に出て見下ろすと、一人の武者が駆けて来る。彼は眼下の下門口でひらりと馬から下り、まだ若い桜の幹に手綱を掛け、慌ただしく石段を駆け登り城内に入った。二人は顔を見合わせた。何かが起こったなと千寿丸は直観した。

四年前守護職を継いだ島津忠隆が、病没したのである。未だ二十三才の若さであった。後を継いだのは弟の忠兼、十六才。頼娃氏を次いでいたが兄の早逝により大守となった。後に勝久と名を改めた彼は、父、兄二人を豪族の反乱の

中に亡くし、幼時より人間不信の思いが深かった。心から信頼出来るものを持たぬ大守を戴いて、ここに薩摩・大隅全域が戦乱に巻き込まれて行く、暗い一層の悲劇の幕が切って落とされたのであった。

戦乱の日々

北薩出水と南薩加世田に領地を持ち、序々に周囲を圧して勢力を増していた薩州家島津の四代、忠興は娘を若き一四大守勝久に嫁がせた。勝久より二才年上の勝気な女であった。弟の実久は勝久より一才年下ではあったが、同じように気が強く権勢欲旺盛で、早くから近隣の領地を窺っていた。

大永二年（1522）、入来院重聡の妹婿高城重隆が病死する。高城家の家督は、十年ほど前すでに重貞の兄重誠が継いでいた。ところが重隆の死の翌大永三年従兄の東郷重朗が急襲して、重朗の父東郷重信が弟重隆に与えた高城を奪って東郷領としてしまった。東郷一族内の抗争であった。重朗は重誠の妻が薩州家と同系の大島島津の娘であることに、神経を尖らせていた。それに重朗には、南下してくる島津実久に対抗するために東郷を強化する必要がある、そのためには直轄地とするのが一番だと思ったのだ。

追われた重誠は入来院に抛る弟の重貞のもとに身を寄せた。

「わしは計らずも領地を失ってしまった。子供たちもまだ若いし再興もおぼつかない。お前は領地もあることだから、お前に家督を譲ることにする。どうか将来の隆盛に努力してくれ」

重誠は無念の思いを込めて重貞に言った。しかし彼も薩州家の圧力をただごとではないことは感じていて、真の敵を見誤ってはいなかった。彼は、大切に携えて来た父祖相伝の緋緘の鎧と国次の太刀を重貞に渡し、譜代の家臣武本右京も譲ったのだった。重貞はこの日から高城姓を名乗ることになる。そして重誠は妻子とともに重貞の領地池頭に構えた家に逼塞したのだった。

養子が旧姓に復したのを機会に、重聡は千寿丸を元服させることにした。九月九日の重陽の節句と決めた。家臣たちの心尽くしの菊花が香る中、千寿丸は父の加冠により、石見守又五郎重朝と名乗ることになる。このところ身長が急に伸びて、すらりとした美少年の重朝の晴れ姿を母光は涙を拭った。雪も夏も集まった家臣たちも口々に

「まあ、ご立派な若殿さまになられた」

と満足気に語り合うのだった。重聡は自分が大守によって加冠されたことを思い、大守の力の弱い不安定な暗い世を嘆いた。

大永五年（1525）、薩州家島津忠興が病死すると、子の実久の権勢欲に歯止めが無くなった。彼には優柔不断な大守勝久が歯がゆくてたまらない。しばしば僭越な行動に出て、勝久のプライドを傷つけていた。二十二才の勝久は結婚して四年になるが、まだ子がなかった。まだまだ若くそのような話はとても早い筈であるにもかかわらず、実久は義兄の勝久に自分を後継者とするよう強要したのだった。これにはさすがの勝久も腹に据えかねて断固拒絶して、妻

を離婚して帰ってしまったのだ。

強力な薩州家の後ろ楯を断ち切った勝久は、重臣たちと協議した結果、当時人望があり南薩に力を着けてきた伊作島津九代の忠良に頼ることに決定した。大永六年、勝久は伊集院に忠良を招き会見した。忠良は三十四才。色黒で眉太く、鼻も大きく高い精悍な面立ちであるが、少しも傲岸ではなかった。頼もしい兄を得たような感じを受けた勝久は、忠良に、同盟というよりは後見人として援けてくれるよう依頼するのだった。

忠良は三才のとき父を下僕に殺され、母の再婚先の相州家島津運久（ゆきひさ）に育てられて、幼時から内外両面に苦勞があった。賢婦として名高い母常磐は、薩南学派の祖桂庵玄樹に朱子学を学んでいて、特に忠良の教育には心を砕いた。彼女は忠良を伊作海蔵院頼源に託け、学問と修行を受けさせ厳しく育てた。生来の資質に加えて、母の配慮による適切な教育を受けた忠良は思慮深く果敢な名将として知られるようになっていた。

薩州家実久とは伊作の南にある加世田で隣接し、一触即発の関係にあった忠良は、勝久の申し出を快諾した。喜んだ勝久は彼に、永吉・日置を与え、忠良の息子十三才の貴久を自分の養子にすることを申し出たのだった。勝久は内心は兄たちが早逝したことを思い、後継を決めておきたいとは思っていたのだが、実久の強引さは許せなかったのだ。一旦はその申し出を辞退した忠良であったが、わが子貴久の英邁な資質は必ずや世を制するであろうことを察し、たつての勝久の要請を承諾したのだった。

これを聞き激怒した実久は、それならば実力を以て大守の地位を奪ってみせようと決意する。実久軍は出水より南下して高城・水引を侵し、なおも川内川の南部にある入来院氏の領地、百次・山田を攻め取ってしまった。そして山崎豊前守成知を百次の地頭とし、岩田ヶ城（上野城・百次城ともいう）を築かせた。

翌大永七年（1527）四月、もう何もかも捨てたいと思った勝久は、貴久を守護職として鹿児島清水城に迎え、自分は忠良の本領伊作に引退することにして、伊作に入って出家隠棲したのである。

六月加治木・帖佐で反乱が起きた。忠良がその討伐に出陣している間に、実久は伊作に引退した勝久を密かに訪れ、再び守護職に復させてやると忠良との離反をそそのかした。まだ二十四才の若さでもあり、二ヵ月ばかりの田舎の出家生活にすぐに嫌気がさしていた忍耐力のない勝久は、やすやすとその誘いに乗ってしまった。反乱を一日で制し、勝久のもとに向かっていた忠良は、実久による勝久の裏切りを知って、止むなく伊作を迂回して田布施に帰ったのだった。勝久籠絡に成功した実久は、勢いをかけて鹿児島清水城に居る貴久を襲おうとした。貴久は辛うじて難を逃れ、夜、道なき道を苦勞して田布施にたどりついたのだった。その際「義」を重んじた貴久は、危険を省みず義父であった勝久を伊作に訪ねて暇乞いの挨拶をしたと伝えられている。

勝久は実久に伴われて鹿児島に入り再び国政を執ろうと試みた。忠兼を勝久

と改めたのはこの時であった。しかし実力の伴わない勝久と人望のない実久に相次ぐ家臣や地頭の反乱が起こり、領内の混乱はますます広がるばかりであった。

別れの譜

六十五才の入来院重聡にとって、この戦乱の世は辛い日々であった。懸命の応戦にもかかわらず、南下する実久の軍の勢いに勝てず、百年以上も前の八代重長の時代より安堵されて来た永利を奪われ、岩田ヶ城を許してしまった。これは何としても奪回せねばならない。焦りが重聡を苛んだ。

重聡は老齢であり先頭切ったの実戦は無理であろう。重朝もまだ十七才。実戦の主将には若過ぎる。必然的に重貞が主将とならねばならない。着々と軍備を整えていた重聡は、戦場に赴く重貞にまだ子のないことを心配した。重貞は八年前東隣の蒲生氏の娘を嫁にしていたが、子宝に恵まれていない。身を寄せている兄重誠の長男は、勝久の命により母方の祖父の島津の一族大島忠明の跡を継いで大島忠泰を名乗っていた。重聡は重誠の次男重弼に娘の珠を嫁がせて、重貞の後継ぎとし、重貞に万一の時の高城家の存続を計ることにした。

珠は十六才。昨年から清色城に移り、行儀や家政の見習いをしている。母に似て甲斐甲斐しく働き、さっぱりした気性で誰からも好かれていた。母の豊は市比野に二反の田と菜園のある住居を与えられ、米を作らせたり、自分でも野菜作りを楽しむ日々を送るようになっていた。そして時折、新鮮な瓜や茄子を土産に、光のところで長話をするのを楽しみにしていた。

千寿丸が重朝となって以来、雪と珠は以前のように重朝と三人で遊ぶことは少なくなってしまう。重朝は軍議や訴訟の処理などに加わり、父と共に過ごす時間が多くなったのだ。千寿丸時代、彼は二人に碁や漢詩を教えたり、知り得る薩摩や近隣の国々の情勢を語って聞かせたりするのが常であった。娘二人は午後のお茶を飲みながら、重朝がふいと現れるのを心待ちにして、他愛ない話にととを過ごすのだったが、近頃はその話も現実的な話題になって来た。

「姉様、お相手は重弼様にお決まりですってね。貞兄様は重誠様のお近くの池頭に新しいお家を建てておいでですって。雪は何をお祝いしようかしら。ご希望ありましたらどうぞ。」

「それはそれは。何をお願いしようかしら。ゆうべお父上様から申し渡されたのだけれど何となく予感していたの。重弼様は貞兄様の後を嗣ぐことになるのですってよ。義兄様がお義父様になるというのも一寸複雑な気分ね。それに実のお舅、お姑様のお世話もあって当分は池頭に住むことになるんですって。」

「貞兄様の内方は、さっぱりした方ですもの、気にすることはないわ。でもお舅、お姑お二人ともお弱くてよくお床に着いていらっしゃるって夏が話していたわ。姉様もご苦労でしょうね。でもやっぱり姉様はいいわよ。何といってもこの入来院の中ですもの。皆よく知っている人ばかり。すぐ相談に乗

ってもらえるわ。」

「そうね。雪様はきっとどこかの城主のところへいらっしゃるのでしょうか。このご時世ですもの。人質同然になりかねないわね。ああ本当に珠は幸せよね。そうそう雪様、この間お描きになった白芙蓉、あれは素晴らしかったわ。千草色の中にぽっかり浮き出て優しくて。あれを扇にして戴けますか。雪様と思って大切にしますから」

「まあ、あれは私も気に入っているの。でも大切にしていただけなのは嬉しいことよ。母様によい職人をお願いするよう頼みましょう。雪のときは、姉様の刺した経袱紗を下さいね。あの紫地の」

「そうね。雪様もそう遠からずお輿入れになることでしょう。珠の袱紗と交換というこゝとして置いて行きましょうね。」

刈り入れが終わり、年貢の搬入も始まった十一月初旬の吉日、珠は高城重弼のもとに嫁いだ。光の贈った夕焼け雲のような美しい打ち掛けを着た珠が駕籠に乗り、重聡の名代の重朝と近習三名が付き添って、澄みきった空の下を行った。珠の持ち物や婚家への贈り物を積んだ三匹の馬も続いた。重聡、光と雪、それに城内にいた男女は、清色川の大きく弧を描いている南端に立ち見送って手を振った。

一同はこの後同じ場所で、合戦に出陣し帰らぬ人となる人々の見送りを何回も行った記憶をよみがえらせていた。そして今後も間もなく出陣の見送りをせねばならないだろうことを、予感して寡黙であった。

激戦の日々

翌享禄元年（1528）九月、六十七才の重聡は岩田ヶ城奪取の兵を挙げた。重聡は兵三百とともに出陣して日笠山の西の麓に陣を取った。重朝も出陣し父の脇に控えた。戦は手勢二十名ほど残し二手に別れて岩田ヶ城に進撃する。一隊の隊長は高城重貞、百五十の兵を率いて北北東より、もう一隊は村尾平次郎時実が兵百三十を以て東より、時を同じくして一斉に攻めたてる手筈であった。

城内は百五十の兵であったが、僅かの間によく準備され、堅牢な城が築かれていた。入来院勢出撃の報に三十名ほどの弓の名手が山々の尾根に潜み、東方より谷を進軍する村尾勢の頭上から一斉に弓を放った。正面からの重貞軍には、一の砦に十分引きつけてからこれも矢襖の攻撃である。一旦は引き再度の攻撃を掛ける号令をかけた重貞が、馬上から村尾隊の様子を確かめた。村尾隊は、彼らに伴走するように尾根を走って来た敵の弓の兵士に城内から打って出てきた一隊が加わって、白兵戦が始まっていた。重貞も負けじと「かかれ、かかれ」と連呼しながら突進する。槍の隊が走り続く。一の砦の弓隊は、素早く城内にかけこみ、城壁から矢の雨を降らせた。ふと見ると村尾隊がこちらになだれ込むように敗走して来る。重貞はもう一度全軍に後退の号令を掛けた。

副将の村尾平次郎が、馬を射られ徒（かち）立ちになったところを囲まれ切り死したのだった。駈けつけた部下が平次郎を切った敵は殺したものの、すでに平次郎はこと切れていた。部下が何とか馬に遺体をくくりつけて引いていた。

将を失った兵は浮足立つて、止まるところを知らない。やむなく重貞は兵を纏め、退却することにした。

村尾隊は十七名が戦死、五十名ほどが相当な手負いであった。五頭の馬も二頭になっていた。重貞軍は、命を落としたものは三名であったが、やはり半数は何かしらの傷を負っていた。

重聡は涙を抑え村尾平次郎の兜を脱がせた。鎧や具足などの遺品をまとめ、遺体は穴に埋めて大きな石を置いた。手負いの者たちの簡単な手当てをすませると、一刻もぐずぐずしては居れない。足早に清色城へと敗軍の列が続く。歩けないもののうち、家臣は竹で編んだ簡単な駕籠で運ぶ。その他は岩影に隠れ夜を待って近辺の農家に潜み、助けを待つしかない。組頭は素早く手下の状態を把握する。岩田ヶ城には追撃の余力はないことだろうが、急を聞いた薩州家の援軍が阿久根辺から駆けつけ、追い打ちをかけてくるかもしれないのだ。

清色城内は、集まった女たちが大車輪で立ち働いていた。敗戦の知らせはいち早く伝えられていた。大鍋で粥を煮る者、鉄瓶をたぎらせて煎じ薬を作るもの、血止めにと蓬を揉むもの、古布を引き裂いて、大量の包帯を作る者。鉢巻きをした光は、てきぱきと命令を下した。

ありったけの筵が集められ二の丸の庭に敷きつめられた。桶という桶には井戸水が汲み上げられていた。残暑も終わったとはいえ日中の陽射しはまだきつい。この庭も程なく吐き気を催すような血の臭いに満ちることだろう。しかし実際の傷の手当ては男の世界の仕事。女は本丸に集められ、血を見ることのないよう配慮されている。

雪は晒に鉄を入れ、引き裂きながら父の無念さを思い涙ぐむのであった。

翌享祿二年（1529）二月、重聡は再び兵を挙げ岩田ヶ城を攻めた。しかし今回も失敗であった。そして岡元重樹の長男重定が戦死した。重朝より僅か三才年上の満十八才であった。重定の死は雪には衝撃であった。

漢学の師岡元重樹の一家は、一族でもあることとて家族ぐるみでよく登城して来た。重定と妹の芳、いたずらの好きな弟孫九郎は、重朝と雪のよい遊び相手であった。凛々しくも色白で細身の兄重朝とは対照的に、骨太くがっしりした重定の男らしさを雪は頼もしく思っていた。兄への憧憬、畏敬とは違って、重定にはもっと気安く話したり頼みごとが出来た。その胸幅と同様に心も広く、何事もしっかりと受け止めてくれるという信頼を雪は持っていた。ほんのり芽生え初めた恋心とも言えた。青ざめて唇を噛んで、負傷者の手当ての品々の補給に走り回っていた雪は、床に入ってたまらず嗚咽した。もう二度とあの太い眉の下の澄んだ瞳で見つめられることも、磊落な笑い声を聞くこともないのだ。

光も夏も雪の嘆きを察して心を傷めた。光にも覚えが無かった訳ではない。父ほど年の離れた重聡との結婚を承知したのには、夏の他は誰も知らぬ思いがあったのだった。光は夏に

「何事も時が流してくれる。静かに時の過ぎ行くのを待ちましょう」と言った。

自分の老いを覚っている重聡は焦りを覚えていた。重定の死の一ヵ月後に、出来るかぎりの兵を率いて、岩田ヶ城より三キロほど北の山田を襲い南下した。敵将山崎豊前守は城を出て篠原口にこれを迎え打った。この戦は平地の白兵戦となった。入来院勢の中で豪雄として知られた種田秀聡、萩原正聡、木場重時らが目ざましく活躍したのだが、勝負の決着はつかず、双方引き揚げたのだった。

翌享禄三年二月、入来院勢はまた岩田ヶ城を攻略。しかしこれも一族の将山口重昌が討死して終わった。

享禄四年六月、四回目の岩田ヶ城攻略が行われた。満七十才を迎えた重聡はもう出陣しない。主将は高城重貞である。今までの戦の全てに重貞は主隊の隊長であった。そして重貞は多くの戦死者を出しながら、未だに落城させることが出来ないことの自責の念にかられていた。重聡に出陣の挨拶をする重貞の顔は、決死の思いに緊張して蒼白だった。

梅雨明けの炎天下、敵将山崎豊前守も城を出て、全力で迎え打つ。この合戦は永溝口の合戦として、その激戦のさまが「永利郷土史」に記録されている。結局入来院勢必死の奮戦にも係わらず敵を破ることが出来なかった。しかも重貞は乱戦の中、討死してしまったのだ。兄重誠時代からの高城家の老将武本右京も、重貞の死を知るや白髪をなびかせ敵中に討ち入り切り死したのだった。

川内市史によれば、現在川内市百次町の徳永原の塔婆群の中に、重貞・右京のものと見られる墓石が見つまっているとのことである。二人の逆修墓は今も入来院のいくさ墓の中にあり、知る人の涙を誘わずにはおかない。

雪の縁談

伊作の島津忠良から重貞の死に弔意の手紙が届いたのは、永溝口の合戦から僅か十日後のことであった。重聡は丁重に礼状を書いて使者に渡した。

一旦守護勝久から全権を委ねられ、子の貴久が守護職に就いて鹿児島に移ったものの、僅か二ヵ月余りで勝久の心変わりによって、やっとの思いで田布施に帰着した忠良親子であった。勝久の居住地とした伊作は、忠良の本拠地である。忠良は勝久が鹿児島に帰ったあと一月後には奪回に成功した。しかし薩州家実久の力はすでに強大であった。

忠良は、貴久を坊の津の一乗院に登らせ、頼仲法印に師事させて学業を修めさせた。教育の大切さは自分の幼時の体験から十分理解していた。そしてこの閉塞状況から脱出するための彼の後楯を、北薩で一番人望のある豪族入来院重聡に決めたのだった。

忠良、貴久は重聡に密かに会見を申し込んだ。重聡の年齢を考慮して東市来と市比野の境の山麓の温泉の宿が選ばれた。九月末、虫の音も細ってきた星月夜であった。重聡は重朝を伴って僅か七騎のお忍びである。忠良、貴久も同様であった。

初対面の挨拶ののち、忠良と重聡は薩摩、大隅の情勢について率直に語り合った。勝久の無能ぶりは目に余っていた。次々と起こる反乱に右往左往するばかりであったのだ。忠良は、これからは貴久を大守として薩隅の平定を図りたい、それが平和と安定をもたらす最良、最短の道だと説き、重聡も全く同感であると告げた。重聡は十三才のとき大守立久によって加冠を受け、そのことを誇に思っていた。大守が次々と若死し力が弱く、わが子重朝には自らが加冠を余儀なく行ったことが残念だった。いかつい面立ちながら訥々と語る三十七才の忠良を噂に違わぬ人徳の士であると重聡は思い、忠良は七十才の温厚な重聡に自分の父のような信頼感を持ったのだった。

重朝はこのとき二十一才。三才年下の貴久の茫洋としていながら芯のある風貌に大人物の資質を感じとっていた。貴久は貴久でこの年上の俊敏な美しい若武者に漠然と心ゆらめくものがあった。その感情が何なのか若い貴久には不明である。やがてはライバルとなるこの二人の若者は父親たちの話を、今大きな歴史の盤上の駒が一手進められた思いで聞き入っていた。

酒肴が供され、忠良の口調は一段と滑らかになった。

「聞くところによると、貴殿はなかなかお美しい娘御をお持ちだそうですな。どうだろ う。この貴久殿に頂けませんかな」

「はっ。娘でございますか。あれはその私の末娘でして、それはもう甘やかせて来ましてな。十分な躰けも出来て居りません。それは貴久様とのお話となれば光栄なことでございますが、何分にも田舎娘でございますぞ」

「いやいや。親を見れば子は分かると申しますぞ。貴殿のお子ならば間違いござらぬ。決して粗略にはいたしませぬ故、是非話を進めて下さらぬか」

「そうまでおっしゃって頂けるとは幸せな娘でございますよな。これはお受けせざるを えませんなあ。しかし世間知らずの娘でございますのでなあ。くれぐれも宜しくご指導 とご庇護くださるようお願いいたしますぞ」

「貴久殿。お前様の花嫁はこれで決まったぞ。この子細をよく覚えておかれるのじゃ。重聡殿の娘御を決して不孝な目には合わせぬと、ここでお誓い申そうぞ」

忠良は満足気に盃を飲み干した。重朝はちらっと岡元重定の戦死以来うかめ顔をしている雪を思い浮かべた。雪がない生活に、この年老いた父は耐えられるのだろうか。自分も雪を手放したくはない。しかし、かつて雪と快活にお喋りし合っていた珠も、今はいない。この貴久との結婚は雪に希望を持たせることになるのかもしれない。薩州家との戦いも有利になり、きっと入来院家の興隆に繋がるのであろう。重朝の頭の中は、多少の酒気も手伝って思考が渦を巻き、傾くような目眩いを感じるのだった。

亀丸城

雪の輿入れは、翌年の早春の吉日と決められた。明けて年号は天文と代わった。

天文元年（1532）二月の朝、東の空の白むのを待って雪の行列は、重聡、

重朝の他五十名の武者に囲まれ、清色城を出発した。馬は重聡、重朝の他に三名。あとは荷を積んでの十頭である。山道を行くので、雪の他の女三人は徒歩である。雪は薩摩紅梅の描かれた打ち掛けを羽織り駕籠に乗ったが、難所も想定してたっつけや、厚手の刺し子の足袋も用意されていた。

見送りは城内のものばかりでなく、家臣やその家族全員が通りに出て別れを惜しんだ。さして高くない城山のふところにある城の周囲は、一族や家臣団の住居が割り振られてあり、みんな雪とは顔なじみである。戦乱の世のこと、二度と会うこともないだろうと思いながら、青ざめた雪は涙もこぼさず会釈し続けた。

光は遠くに嫁す娘を気づかって、雪の小間使いの松と下働きのとめのほかに自分が実家から連れてきた夏も雪に付けて送った。いずれは大守の奥方なのだ、と淋しさを紛らわすように光は自分に言い聞かせながら、いつまでも佇み見送った。

一行は、八重山系の重平山の西を南下し、伊集院の北の神之川上流にて貴久の迎えの一隊と合流した。ここまで来れば忠良、貴久の勢力下である。ほっとした一行は、用意された宿に上がって賑やかに酒を酌み交わした。

翌朝は川沿いに下って海に出た。雪もお付きの女たち、男衆の何人かも海を見るのは始めてである。一斉に一行の歓声が上がった。そこからは海岸沿いに遙々と続く白砂の吹上浜を南下する。

素晴らしい快晴の日であった。右手には緩やかな弧を描いて見渡すかぎり白砂の渚の続く吹上浜。風雨が枝振りに磨きをかけて、点々と続く松林。全く一幅の絵を思わせた。左手には金峰山がずんぐりとした姿を現している。話には聞いていたが、この雄大な美しい景観に皆感動していた。そしてそれぞれ身近な人々に見せてやりたいものだと思った。

やがてオレンジ色に輝きを止めた太陽が丸い姿を見せながら、東シナ海に沈んで行く。そしてその輝きを受け継いだかのように、水平線から金波銀波が燦めき揺れながら寄せて来る。その雄大な美しさは山国の一行を十分魅了した。重朝は、この大きな海の長い水平線の眺めは常に落日ばかりで、ここからは決して登って来る太陽を見ることはないという当たり前な事実にも、何か運命的な不思議さを感じるのであった。

一行は、忠良が用意を整えておいた、その名も奇しくも同じ入来浜の宿で草鞋の紐を解いた。湯浴みを済ませ、ゆっくりと夕餉に向かう。そして今まで口にしたことのないほど新鮮な透き通るような白い水イカの刺し身を、大騒ぎをしながら食べたのだった。

翌朝はは昼過ぎに出て、亀丸城の麓の宿に到着した。一行は湯浴みして衣服を着替え、丹念に輿入れの準備をした。雪は白無垢の花嫁衣装。父とは何回別れの名残を惜しんだことだろう。この二ヵ月、お互いをいたわる気持ちが胸にせまり、殆ど無言で父の酌をする日々であった。今また雪は無言で父に深く頭を下げた。年老いた父はただうなずき目をしばたたくばかりである。

重聡がわざわざ京で作らせた新しい型の雪の駕籠には、漆地に金で入来院家

の家紋が入れられていた。日が落ちると一行は家紋入りの提灯に火を入れて、隊伍を整えて亀丸城に向けて暮れなすむ道を最後の出発をする。

亀丸城は、伊作川の上流の山ひだを登って行く要害の地である。つづら折りの山道の角々にはかがり火があかあかと焚かれ、お祝いの気分を高めていた。本丸の手前は急な細い坂道である。駕籠を降り、夏に手を挽かれ、松に裾を持たせて雪は登る。

重聡が先頭に立ち、雪と女たち、重朝、重臣三名が表口より城内に入った。広間に通ると、忠良父子、家臣が着座して待ち受けていた。たそがれの薄明かりに、はやばや燭台に火が灯されている。滑るように静かに歩む雪の、その清楚な美しさにたくまずしてざわめきが起こった。

忠良、貴久の前に雪を挟んで重聡、重朝、残りは後方に座した。丁重な挨拶を交わした後、雪は貴久の隣に設けられた席に座る。貴久は雪が部屋に入ったときから、その目は雪に釘付けになっていた。聞きしに勝る美しさだと思った。そして昨年、手放すことに躊躇していた重聡の表情が頭をかすめた。貴久は、この女と幸せな日々となるよう絶対努めるぞと自分自身に誓うのだった。雪は満十八才。貴久もあと二ヵ月あまりで十八才を迎える似合いの夫婦雛というには、少々いかつい貴久ではあるが、清純な若い二人を前に、いつか賑やかな酒盛りになっていた。

宴は和やかに節度を持って進み、三時間ほどで重聡一行が退出した。雪は手燭を掲げた女に臥所（ふしど）に案内された。すでに夏ととめが床をのべかすかに香を焚いて待っていた。雪は光の心尽くしの花嫁衣装を脱ぎ、これも光の手になる夜着に着替えて正座して貴久を待った。

確かな足取りで入って来た貴久は、雪の前にゆったりと座って、雪の手を取った。

「遠路をよう来られた。戦国の世ゆえ明日も分からぬ日々ではあるが、生きているかぎり大切にするつもりである。共に仲睦まじう過ごそうぞ」

「宜しゅうにお願い申しあげます。雪はひたすらあい勤めます」

貴久はつと立って燭台の灯を消した。

貴久のぎこちない営みを雪も混乱の中、優しく受け止めた。太古からの男と女とはこのようなものであったのかと思った。やがて激しく果て雪の上に崩れ落ちた貴久を、母のように抱いて深い眠りに落ちた。

明け方近く、貴久は再度求めて来た。雪もかすかに覚える肉の悦びに恥じらいながらも応えていた。再びの眠りのうちに、遠くの鶏鳴がいつか軒先の小鳥の囀りに代わって、夜も白々と開け始めていた。

新しい日々

雪の新しい生活は、穏やかに始まった。本丸の南西に増築された十一坪の建物は、三部屋に仕切られ、四坪の部屋は城内には数少ない畳の間で、雪の居間である。濡れ縁の先には形の面白い石が置かれ、枯山水の趣で、紅白の梅や桜など花を楽しむ木も植えられていた。山北にある清色城の梅は僅かにほころび初めていたばかりであったが、ここの梅はす

でに満開で雪を歓迎するかのようであった。

身仕舞いを済ませ、二人の朝食を済ますと、雪は改めて舅、姑に挨拶をした。男盛りの忠良と大年増の貫禄のある姑の寛は目を細めてこもこも言った。

「いや、昨日はご苦労じゃった。それにしてもお美しい。貴久殿は果報者じゃのう。慣れぬことも多かるうが、何事もこの寛に教えてもらうよになされよ。この戦乱の世のことじゃ。我等に何が起ころうとも動ぜぬお覚悟で、良き子を産みお育て下され。貴久殿には、大守として一日も早くこの薩隅を平穏な地となして頂かねばならぬでの中」

「雪どの、誰も嫁いでの初めは慣れぬものです。私も西福寺様にすっかりお世話になり今日があるのですよ。実の母と思って何事も、相談してほしいですね」

姑の寛は薩州家島津の成久の娘であった。色白で、頬骨の張った人によく見られる理知的な顔立ちで、夫を支え、城内の切り盛りを見事にこなしていた。今まで島津家から嫁に出すことはあっても、地頭の渋谷氏からの嫁入りは初めてであった。しかし寛は、この時期夫や息子の本当の力になってくれるのは、入来院氏のみだということを理解していた。忠良一家は先ずは実利を優先させたのであった。

「これでよかったですね。あの娘には大守夫人としてふさわしい気品もあるし、気立てもよさそうに思います。それにほっかりと白い花が咲いたような気がしませんか」

と寛は忠良に言った。

十時頃、重聡親子が別れの挨拶に登城した。忠良一家は本丸の下まで下りて見送った。雪は今や島津家の一員として見送る。遠ざかる父の肩が心なしか細く、孤愁が漂っているように見えた。初めて身を切るような寂寥を感じた雪は、涙の滲むのを拭いもせず促されるまで佇んだ。

亀丸城は、三代久経の子久長を祖とする伊作島津の本拠地で、八代忠良まで約百五十年間ほぼ此処を中心として過ごして来た。金峰山系の小高い山頂を削った本丸は千坪ほどもあって、空濠で三方を囲まれている。上り口の東側の山頂は、貯蔵倉のある蔵之城、西には御飯屋城、花見城、西之城など空濠を隔てて存在する。一段高い山之城や周囲の峰々には砦の城があって、物見が置かれていた。要するに山ひだ深い要害の地である。女だけでは城郭群から下には滅多に下りることは出来ない。安全といえば安全ではあるが、下界とは隔絶され、一つの世界をなしているのだった。

清色城は、東方が馬蹄のような形に突き出している地形の外側を、八重山系からの清らかな清色川が包むように流れ、天然の堀をなしている。風水学からして文句のない場所ともいわれるその城は、さして高くない城山の五本の尾根の頂上部に作られた曲輪群から成り立っていた。台地

とは堀切で切断されているが、峻険とは言えないその山城は何処か長閑ささえ感じられる城郭であった。

入来院氏の私領ではあったが、江戸時代は山城は使用されず、館が東麓に置かれた。その館の跡は明治初年より入来小学校として、多くの人々を育て、人々の心の故郷として残っている。家臣団の宅地である麓も隣接していて、未だに残る中世の面影を残すその街並みを散策に訪れる人も絶えない。

一方亀丸城は、鹿児島県の史跡として一応公園にはなってはいるものの、普段訪れる人もなく、古い石碑が点在するばかりの草深い城址で、全く対照的である。

帰宅した重朝は、一言も口には出さなかった雪の、内心の不安や孤独感を痛いほど感じていた。雪を望んだ忠良や貴久の思惑もよく分かっていた。潔癖な彼は政略による結婚を快く思わなかった。雪の輿入れから一月後の三月吉日、重朝は家臣種田秀聡の娘律とささやかな華燭の典を清色城内で挙げたのだった。

戦果

岩田ヶ城を四回も攻めて成功しなかった重朝は、高城重貞を失って暫くは直接攻めることを諦めた。義兄亡き今、重朝はいよいよ自分が中心に活躍する時が来たと思った。彼は、今まで失敗してきた直接に岩田ヶ城を攻略することを避け、岩田ヶ城と本拠地出水の分断を先ず図ろうと決めた。

北薩の秋は急速に訪れる。日中の暑さはさほど変わらぬうちに、朝晩は寒いほどに冷え込み始める。やがて稲が色づき、虫の音も細くなった頃は収穫である。何よりも恐ろしい台風も今年は免れて、人々の表情も明るい。

新妻と気安く他愛ない話に興じながらも、重朝は戦略戦術が頭から離れない。じっと機を窺っている。収穫も終わり年貢の収納も終わると、いよいよ時が来たと思った。

天文元年十一月末、重朝は密かに兵を領地の北端の久住に集めた。そして久住城の山系の北麓を川内川沿いに南下し、一気に平佐城を攻め立てた。そして十二月五日夕刻、ついに平佐城を陥落させたのだった。彼は城には入らず、直ちにその南に陣を敷き、川内平野の中樞を握ったのだった。

重朝は戦勝の御礼として出陣の際に祈願した諏訪神社に一所の地を寄進した。

翌天文二年二月九日の夕刻、亀丸城に慶びの声が上がった。嫡男、後の義久の誕生であった。初産のねぎらいに雪の枕辺に座った若い父貴久

は、まだ赤くくしゃくしゃな顔でしっかり目を閉じている嬰兒を覗き込んで

「何だ。まるで猿みたいだな」

と言った。

「まあ。これは殿のお子ではありませんか。夏が兄様のときよりも大きいと言っています。きっと殿のようにがっしりした武将におなりです」

「うむ。私のようにするには二十年もかかるのだから、まだまだ長いことよのう。それまでに戦乱が収まって欲しいものだ」

「そうですわ。そして私たちはじいさんばあさんになって、一日暮でも打ちましよう。ゆっくりお茶を飲みながら、殿の手柄話を聞くのも楽しみなこと。本当に戦のないお国にして下さいませね」

雪は自然と貴久に打ち解けて、昔の快活なおしゃべりを取り戻しつつあった。貴久もそんな雪と過ごす時が何よりも楽しみであった。まだ若い二人には、五年、十年の先は随分と遠い先のように思えた。この戦乱の世の様々な変化は、時の流れに重みを加えている。後々振り返れば、ほんのあっと云う間にも思えるものなのだが。

嫡男誕生のお祝いに沸いているその翌二月十日、伊集院南郷城の城主、桑波田孫六が約束に反して勝久方に着いて背き、兵を挙げたとの知らせが入った。慌ただしく軍議の日々が続く。

伊集院南郷について忠良は一計を案じ、琵琶弾きの盲僧を間者として送り込んだ。桑波田孫六は獺が好きでよく出掛ける。三月二十九日孫六たちが獺とて山に登ることを間者から情報を得た忠良は、孫六たちが留守の間に、兵士達を獺夫や樵に変装させて、白昼堂々と南郷城に向かわせた。兵士達もなにくわぬ顔でゆっくり歩いて帰城したふりをして中に入り、一気に内外から南郷城を攻め落とすのだ。貴久の弟忠将は、十四才で敵将を倒し初陣を飾った。その後南郷城は永吉城と改められた。

亀丸城に戻った兵士達の手柄話は、面白く尾ひれが付いて語られ、城内はまた賑やかさを増した。そしてその陽気さが益々上り坂の運勢を呼び込むようであった。

貴久の子は、彼と同じ虎寿丸と名付けられ、一切の世話は乳母に任せられた。清色では、母の乳房に触れることもあった雪には、何かもの足りない淋しい思いがする。それにしても片時も虎寿丸のことが頭から離れない。便通はあったろうか、乳の飲み具合はどうだろうか、顔色はどうだろうと次から次へと気掛かりである。子とは母親をこんなにも精神的に束縛するものかと、雪は思った。そして折りあるごとに手元に連れて来させたり自分で赴いて、あやしたり抱いたりして、子の未来を想像して過ごすのだった。

父重聡からも祝いの太刀と絹、酒が贈られてきた。雪は父からの品というだけで涙ぐんだ。そして虎寿丸の枕元にそれらを飾って、一日も早

くこの可愛い孫を見に来てほしいと願った。

四月に入って、重朝が重聡を支えて祝いに訪れた。うらうらとした春の午後であった。「ご嫡子のお誕生、おめでとうございます。また南郷城でのご戦果、誠に恭悦至極に存じ上げます。大変見事な作戦だったと、入来辺りでも評判でございますぞ」

「いや、重朝殿がしっかりとお働きで、我が方も安心してこちらに集中出来るのでござるよ。雪どのお肥立ちもよろしいようで、心配はご無用でござる。また孫がなかなかのものでしてな。将来が楽しみでござる。重聡殿も長生きせなばなりませぬぞ」

呼ばれた雪は、しっかりと虎寿丸を抱いて、産後初めて大広間に現れた。忠良、貴久に目礼して、父と兄に近寄り胸元の赤子を見せた。生後一カ月の虎寿丸は、じっと祖父の眼を見つめている。重聡は抱き上げ、頬擦りしたい衝動をこらえて、お祝いの言葉を述べるのだった。昨秋訪れたときは、やや疲れた感じを受けたのであったが、今は血色も肉付きもよい雪に二人は安堵して帰路に着くのだった。

四月二十日、清色城でも重朝の嫡男、後の重嗣が誕生した。髪の色も眼も口も大きな元気な子であった。重聡は直系の孫に重朝と同じ千寿丸を名乗らせた。そして七夜の命名の祝いの夜、長い間背負ってきた家督の座を重朝に譲った。入来院重聡満七十二才、重朝満二十三才の若葉の候であった。

蝉しぐれ

北薩は暫く大きな合戦はなかったものの、重朝は平佐城を根拠地にして、徐々に川内地方の勢力を確固たるものにしていった。

一方貴久の方は、守護に返り咲いたと自認している勝久と薩州実久、忠良派、中立派と入り乱れて紛糾が絶えない。特に日向、大隅は複雑な合従連衡を繰り返し対立し合っている。初めは勝久を一応立てていた実久だったが、旧臣の代表として勝久を諫めた川上昌久に死を与えた勝久の暗愚ぶりに、遂に実久も離反するようになっていった。

そんな混乱の情報が亀丸城に慌ただしい動きを生ぜしめていた。天文四年の夏は雨も少なく暑い日が続いていた。七月二十三日の未明、次男、後の義弘が誕生した。しわがれた産声も大きな赤ちゃんは色白で、髪も黒々としていた。二人目でもあり、安産だった。雪はすっかり落ちついた奥方ぶりで、暑さの中を過ごした。

産褥の雪から離された虎寿丸は、よちよち歩きも上手になって、隙あらば母の部屋へと駈けてくる。開け放たれた部屋に飛び込んで母の枕辺に立ったり、隣室の赤子を覗き込んだりして小さなつむじ風である。そして雪に優しく頭を撫でてもらうと満足して立ち去るのだった。貴久も折りにつけ様子を見に来て、雪に時局の話などしてやる。

「勝久公にも困らされるのう。お側に的確な判断の出来る者が居らないことが問題だと思っていたが、耳の痛いことをお聞きにならないのではどうしようもない。この鹿児島 の混乱状態では、重聡殿、重朝殿も城を空けることは出来ないだろうなあ。秋ごろには まだ祝いの来城は無理かも知れぬぞ」

話しながら貴久は、雪やこの子らのために一日も早く安定した基盤を作らねばならないと固く決意を新たにすのだった。

山に囲まれた亀丸城はこの夏ことのほか蝉の鳴き声が激しい。夫の立ち去ったあと雪は目を瞑り、夫や父、兄の無事を心から祈るのだった。

それから間もない八月に、勝久に怨みをもつ川上氏の余党は実久を擁し、鹿児島に勝久を攻め、鹿児島の集落に火を放った。乾燥していた民家は、一斉に燃え上がり、天にも登る炎が七日間も続いた。勝久は、北原氏、祁答院氏・肝付氏らに援けを求めた。それに応じた三氏の兵が鹿児島に乱入して、九月九日多くの死傷者を出した末に、実久の軍を破り、谷山の神前城まで追撃した。しかし鹿児島の兵の内に実久に通じるものも出て、反撃が始まった。それからはかえって勝久軍は敗れ、実久軍は再び鹿児島に乱入したのだった勝久は鹿児島から小舟で帖佐に逃げ、渋谷の一族、祁答院氏に頼り、その後吉松の北原氏を頼った。そしてついに勝久は二度と鹿児島の地を踏むことなく、母方の豊後の地で四十年近くを過ごし其処に没することになる。

勝久の要請を受けて立った祁答院氏を援け実久を谷山に追った兵のなかに入来院勢もあった。入来院重朝としては、実久の敵はわが味方なのであり、身内の祁答院を援けることは当然であった。決して忠良、貴久に刃を向けた訳ではない。藁をも縋る思いの勝久は、早速十月、重朝に郡山か隈之城どちらでも欲しい方を与えるとの書状を送り、何とかつなぎ止めたいと願った。実力はないものの、まだ守護である自負もあった。重朝も名目であれ、大守からの授与は有り難く受けた。

勝久を追い出し鹿児島に入った実久は今や絶頂期であり、実質的には守護職を握っている。しかしその狡猾な性格を知っている諸豪族は、大義名分のない実久の態度を認めようとはしない。それが一層混乱を引き起こし、南九州全体にいざこざが絶えないことになったのであった。

伊集院攻略

権謀に長けた伊作の忠良は、はっきりした政見もなく己が損得で離合集散する豪族たちの動向を把握しながら、当面の敵である実久を攻めて、自分の勢力を伸ばす方針を着々と実行に移していった。かつて勝久に与えられた伊集院であったが、今は実久に占領されている。占領以来、実久は一宇治城をはじめ、長崎壘、神殿、竹山、福山、犬迫などに壘を築いて兵を集めていた。そしてそれは忠良、貴久の根拠地の伊作を、南の加世田からと挟みつける形になっていた。忠良、貴久にとっては、まさに目の上のたんこぶであり、正式には伊集院は自分たちの土地であると

思っている。そして出水に根拠地のある実久の北からの補給路を絶つためには、入来院氏の協力が絶対に必要なのであった。この所重朝がしきりに川内地方に勢力を伸ばしていることこそが、出水からの実久軍を阻み、忠良、貴久は安心して伊集院攻略に取りかかれるのである。

天文五年三月初旬、一宇治城の城主町田用久が鹿児島に出掛け城を留守にするという情報が入った。三月七日、忠良、貴久は一千騎の兵を集め夜陰に乗じて一気に城を攻め落とした。この時も内部に詳しい者の手引きで、塵だしの口から入り込み、城内から火を掛けたのであった。忠良は堅固な伊集院城の落城を勝久に報告し、勝久を招致しようとした。それは勝久に貴久の実力を再認識させることと、一応勝久を戴くことで諸豪族に大義名分が立つと思ったからであった。しかし勝久が身を寄せている北原氏の了承が得られなかったようで、遂にそのままになってしまった。

勝久は、出水からの実久軍を阻止し、貴久に協力している重朝に対して、七月二十三日川内の百次の地を与えるとの書状を送った。百次は例の重聡が四度も失敗している岩田ヶ城の地である。この地はかつて入来院氏が所有していた永利城に付随していた。しかしまだ実久の将山崎豊前守が固く守っていて、与えると、言っても空証文のようなものにしか過ぎず、攻めて勝ち取るほかはないものであった。しかし何とか返り咲きたい勝久はせつせと実のないご褒美を重朝に送り続ける。

秋になって忠良、貴久は伊集院の他の壘を次々と陥落させて行った。天文六年（1537）正月に、竹山壘の攻撃が始まる。忠良は重聡に援助を要請した。重聡はもう満七十五才。このところの実戦は全て重朝任せであった。しかし最愛の娘の舅の要請である。重朝と共に手勢三百を率いて加勢に赴いたのだった。娘に肩身の狭い思いをさせたくなかったし、伊集院が婿殿の支配下ともなれば、入来からの往復は安心となり、今より度々外孫の顔を見ることも出来ようという楽しみもあった。

薩藩旧記雑録卷四五 2291に

「一明者天文六年丁酉正月七日、竹之山之柵ヲ被攻、従入来院合カス、他之勢ヲ借事是始也・・・」

とある通り、他の一族に援助を要請したのは、忠良父子にとっても初めてのことであったのだ。今や忠良父子にとって重聡は心許せる唯一の人物といってもよかった。

戦は勝利し、敵将肥後盛治は殺された。

亀丸城に引き揚げた忠良父子は、早速重聡父子を招き戦勝の祝宴を上げた。兵士たちにも二の丸の庭に酒樽が持ち込まれ振る舞われた。城内では忠良の妻寛とともに雪も席に連なった。雪はその時第三子を身ごもっていて、本当は少しはいける口ではあったが、酒は控えていた。この歳になっても自分のために戦に加わってくれた父に、雪はいつもながら涙ぐんで頭を下げるのだった。時折駆け込んで来る二人の孫に、重聡は

ただ目を細めるばかりであった。不思議と重聡父子は、小さな孫たちに人気があった。

「イリキのじじ。イリキのおじ」

孫たちはそう囁しながら、二人の回りを駈け巡る。忠良は親馬鹿ならぬ祖父馬鹿そのものといった表情で、手放しで孫をほめそやすのだった。それは何物にも代えがたい重聡への感謝の気持ちでもあった。

「なあ重聡殿。良い子や孫に恵まれる幸せは、これ以上のものではありませんな。貴久殿は立派な大守におなりであろうが、この虎寿丸は三州にはとどまらぬ九州全土に号令するようになるかも知れませんぞ。二人とも大人物の器なこと間違いござらぬ」

「それはそれは。重朝もわが孫千寿丸もきっと喜んで若殿の支えとなりましょう。それまで生きていたいものでございますな。あと二十年、いや十五年で十分でございますよなあ。本当に歳は取りたくないものでございます」

翌朝、重聡父子が、兵を率き連れて引き揚げると、忠良父子は直ちに次の作戦を練るのだった。そして二月には、福山、犬迫の壘を下し、伊集院は完全に忠良父子のものとなったのだった。

勢いに乗った忠良、貴久の軍は鹿児島に進撃し、三月十二日実久の軍を紫原に破って、鹿児島に入った。伝えるところでは、鹿児島の士民は歓呼して迎えたとのことである。

重朝は、忠良父子の鹿児島入りに際しては、彼らが去年のように勝久を、名目上でもあれ戴くことだろうと考え、勝久の帰還の便を図ろうと申し出た。勝久は喜んで、三月十四日付で重朝に郡山城と舟町を与える書状を送っている。しかし今度は、忠良は勝久の帰還を望まず、彼を無視したのだった。もともと忠良は、二転三転する勝久にはもう懲々だと思っていたし、これからは貴久の世になるのだということを示すべき時が来たと考えたのだった。

ひとときの幸せ

忠良父子が鹿児島に入って見ると、今までのように南薩中心の世界とは別の広い世界が待っていた。其処では大隅、日向にも眼を配る必要がある。忠良はまだ自分たちの力不足を強く感じた。実久は、一月も経たないうちに、川辺、加世田の兵を募り、忠良父子の留守の阿多、田布施を襲おうという計画を始めていた。忠良は、これは一旦実久と和睦せねば立ち行かぬと思った。そこで実久の加世田、川辺と忠良の手にした鹿児島、伊集院、吉田、谷山とを交換し、和睦しようではないかと申し出た。しかし実久も、一見よい条件のようではあるが、伝来の地と腹の中も分からぬ土地との交換は承服しかねるものであり、忠良の深謀を疑っていたので、遂にその交渉は纏まらなかった。そこで忠良は、加世田からの実久の侵略に備えるため、一旦は田布施に帰らざるを得なくなった。

そんなざわめきの中の七月十日、雪はまた男子を出生した。後に太閤秀吉に死を賜った悲劇の主人公、後々の世まで「金吾さあ」と慕われた三男歳久である。一昨年の義弘と同じ体力を消耗する真夏の出産が続いたことで、雪は今度はなかなか体力が回復しない。このところの戦勝とともに貴久の出陣の回数は増えて、雪は夫の無事を祈る不安な日々が多くなっていた上、城中に戻っているときも、軍議が多く、雪と共にゆっくりくつろぐことも少なくなった。また、この春からは貴久は鹿児島で過ごすことも多くなっている。男衆のいない城内は、少しのことでも波風が立ちやすかった。嫁姑の目立った確執こそ無いものの、仕える女たちは、やはり二手に別れてしまう。そんな気疲れと心細さが肥立ちの遅れに現れていた。

初秋、重聡はお祝いの品を持参して雪を見舞った。重聡が来訪を希望していることを知って、その日は貴久も鹿児島から馬を飛ばして戻っていた。今回は重朝は城を留守に出来ないが、重聡は孫の千寿丸を同道して来た。貴久の嫡男の虎寿丸とは同い年の満五才である。初対面の二人は直ぐに仲良しになって本丸の中を遊び回った。次男の菊寿丸も後を追って走る。同じく祖父といっても、忠良には何となく煙たいところがある。イリキのじじは、ただただ優しく、髭を引っ張ったり、背によじ登ってもニコニコしている。このじじは庭に出て、毬を転がしたりして遊んでもくれるのだ。子供たちの歓声に久しぶりに城内は活気づいた。

その夜貴久は年取った舅と宴を開いた。酒が入り涙もろくなっている重聡は、眼をしばたたせながら、

「おめでとうござる」

と繰り返していた。

忠良も密かに田布施から戻ろうとしたが、実久とはお互い諜報活動が盛んで油断は出来ない状態であった。密かに不穏な動きの続く加世田から目を離なす訳にはいかない。今回は「ゆっくり孫たちと過ごされよ」との文を届けるに止まった。

重聡は三泊して帰った。重聡の前に抱えられて馬に乗って出発する千寿丸を虎寿丸は羨ましがった。つづら折りの山道に一行が見えなくなると虎寿丸は父にねだった。

「虎も馬に乗せて下され」

貴久は笑って虎寿丸を鞍に抱いて城下を一巡りした。菊寿丸には二の丸の庭を二回まわってやった。父と一緒に用意された昼食をとりながら、二人は交々母に父との楽しかったひとときの報告をするのだった。久しぶりの親子水入らずの時を、雪は幸せ一杯といった表情で過ごした。

しかし貴久には大守への道を歩まねばならない厳しい現実がある。二人の兄に比べて、やや色黒で、鼻も口も大きくしっかりしている忠良に似た赤ちゃんを、暫く膝に乗せて揺すりながら、雪や子供たちとの会話を楽しんでいた貴久であったが、三時頃にはもう出立の準備が整ったと

の知らせが入った。僅か三日の滞在であった。まだ本調子でない雪は、本丸の下門口までの見送りである。

目を上げると、金峰山が柔かな陽光に錆色に輝いて、駆け足で過ぎゆく秋を精一杯受け止め、仕合わせの刻の名残を惜しんでいるかのようであった。

拡大する版図

実久には、日向、大隅の地にかつて一緒になって勝久と対峙した豪族たちがいた。忠良が田布施で頑張っているのだから、実久はその者たちと糾合して東方から攻めようという計画を立てた。その年の暮、実久は大隅、日向を訪れ、自分を守護職として認め、忠良、貴久と対決してくれるように頼んで回った。都城の北郷忠相、飫肥の島津忠朝、清水城の本田薫親らは、実久に同調した。彼らにとってはまだ忠良父子は全くの新参者である。

しかし一人新納忠勝、忠茂父子は実久の守護職に就くことに反対した。そこで実久は先ず新納氏を滅ぼそうとして、生別府城の樺山幸久も誘って新納氏の領地の侵食を始めた。天文七年正月、二月、四月、七月と次々に城を陥し、ついに新納氏の領地を全て分け取りしてしまった。七月二十六日、新納忠茂は、母の実家の佐土原の伊東氏を頼って落ちて行ったのだった。こうした悲劇にも忠良、貴久はまだ非力でどうすることも出来ない。

戦いの主流が東に移っているこの間は、忠良もよく亀丸城で過ごすことが多くなった。孫たちの手習いを見たり、寓話などしてやって、人の道、将の道、王の道を説いた。

一方、入来院重聡は、三月に一度ほどは雪と孫の顔を見る許しを請うて来た。その度に孫の千寿丸も連れて来た。亀丸城では、子供たちが待ち構えている。貴久は時間の許すかぎり亀丸城に戻った。多少の余裕のある折には、重朝も招いてお互いの情勢の交換などするのだった。面立ちの整った凜々しい重朝は、城内の女たちの人気者で、一際明るく賑やかになるのだった。

忠良は何としても加世田を手に入れなければ、足元から掬われる危険があると思っていた。十二月になって、いよいよ加世田攻撃を開始する。しかし敵も待っていたかのように反撃して、大激戦になった。忠良は流れ矢に傷つき、はやる忠良を家臣達が無理やり背負って退却させた。このとき自分に代わって奮闘戦死した三人を悼み、忠良は後に六地藏塔を建立して供養したのだった。

この不成功は、正面切った加世田攻撃は無駄なことを教えた。忠良は家臣の提案を入れて、一計を案じた。先ず夜襲を紛らわすために、幾夜も水鳥を驚かせ飛び立たせては、城内の人々に水鳥が飛び立っても警

戒しないよう馴れさせておくのであった。そして間者からの十二月二十九日には城兵の多くが正月のため家に帰るという情報を得ると、その夜田布施を出発したのだ。忠良は、貴久、弟の忠将すべてを参加させ、総力を挙げて攻め込んだ。そして二日間の大激戦の後、加世田の城を陥落させたのだった。忠良は自ら命乞いをする敵将の首を刎ね、大手門外の樹上に晒したのだった。時に天文八年一月元旦の早暁であった。

三月に入って、貴久は谷山、神前の城を陥し、忠良は川辺を平定して南隣の脅威は殆ど無くなった。

勢いに乗った忠良、貴久は、六月になって実久方の市来を攻めることにした。貴久は七名の従者とともに入来院清色に重聡の援軍を頼みに行った。重聡は快く応援を引受け、片腕とも頼む萩原采女を間道の道案内として付けて帰した。重聡は士卒を従えて駆けつけたが平城はすでに陥落していて、重朝は本城の攻略に残ることとなった。

この時、忠良父子は、大層喜んで、

「後代に至るまで入来院を味方に頼み二心なかるまじ」

「川内地方は手の及ぶかぎり切り取るべし」

と重聡父子に伝えたが入来院旧記に書かれている。しかしこれはあくまで口述であって、文書として残されていないことが、入来院氏の悲劇であった。まだまだ北薩に於ける実久の力は強い。日向、大隅の攻略が控えている忠良父子には、少しでも実久の力を削いでくれることを願って、こう述べたとしても不思議はない。

重聡父子は、これを川内地方を掠取すべしとの命令と受け止めた。入来院系図重朝の記事に

「蒙川内方宜掠取之嚴命」

とある。

市来本城が陥落したのち、一呼吸入れた重朝軍は、宿願の百次岩田ヶ城に向かう。忠良父子の命令でもあると、入来院勢の士気は大いに上がった。彼らは今回は難なく城に突入し、名将山崎豊前守は討死したのであった。実久に占領されて以来十四年ぶりの奪回であった。

この年九月には隈之城も奪回して、重朝は家臣種田秀聡にそれを守らせた。そして七十八才の重聡も隈之城に居を移すのだった。それは何と云っても隈之城が清色よりも伊作の雪や孫に近いからであった。

その後も重朝は着々と川内の各地を取り込んで行った。勝久によって与えられた郡山も含めると、今や薩摩のかなりの部分が重朝の領地となっていた。

一方実久は、加世田、川辺、市来を失い串木野も失った。そしてやはり勝ち目はないと悟って、忠良、貴久に和を請い出水に退いた。ここに十三年ほども続いた貴久、実久の守護職争いも漸く決着が着いたのだった。

薩州島津実久の勢いが衰え、貴久の外は守護職を担うべきものがいなくなつた天文九年以降、忠良父子は大隅、日向の平定に専念する。これらの地は代々島津氏の領国であり、島津氏の分家や代々の家臣の居城の地である。しかし南北朝以来、合従連衡を繰り返し、長い間お互いの食い荒らしに努めて来た。これまで正面からの武力のみではなく、諜報と策謀を交えて敵を破って来た忠良父子である。ここでも情報の収集を第一にして、その知謀を働かせ、時には譲り機をみて奪い、着々と諸将を膝下に押さえて行った。

八十才の重聡はもはや伊作を訪れる体力はなかつた。雪との往復に近いことから隈之城に居を移したものの、近くに移ったことに満足して、実際には出掛ける気力も萎えてしまった。めっきり白髪が増えた光を身近に呼んで、昔語りに明け暮れるようになっていた。ここは、山中の入来より多少は気候も穏やかで過ごしやすく、串木野の新鮮な魚も食卓を賑わせる。緊張の解けた重聡は、日溜まりに座って、いつかうとうとしていたりする。そして思いついたように雪に手紙を書いては、返事はまだかと繰り返して言うのだった。

貴久は、重聡を気づかう雪に、伊集院一宇治城に住まうようにと言つた。一宇治城は、伊作と隈之城の中間点であり、女でも行き来が可能である。貴久もいずれは拠点をそこに移すつもりである。三人の子供たちも教育を受ける年頃となり、それぞれ武芸や学問の師が付けられ、暇な時間も忠良が膝元に呼び寄せて薫陶することが多くなつた。貴久は雪が子供たちを取り上げられてしまったような淋しさを味わっていることに気付いていた。それに健在で賢明な忠良夫妻のもとで、嫁として仕えるよりは、気の済むまで先の長くない舅との時間を持つ方がよいだろうと思つた。

天文十年春、雪は一宇治城に入った。子供と別れた雪を気づかって貴久も亀丸城より一宇治城で過ごす日が多くなつた。亀丸城には、月一度は雪も伴って戻るようには努めていたが。夫の思いやりに感謝しつつ、雪はせつせと父に返事を書く。貴久の留守の折は隈之城を訪れて、二三日を父母と過ごすこともあつた。最初は十年振りの再会に涙をこぼして喜んだ光も、この次は孫たちに会いたいものだなどと言うようになった。束の間の平安であつた。

実久の脅威が去り、いまや嫡男の重朝は着々と勢力の範囲を拡大している。外孫は未来の大守であろう。雪とも会えてゆっくり昔語りも出来た。こうして満ち足りた思いのうちに安らかに重聡は逝つた。天文十一年の早春であつた。

重朝は、雪のために長年住み慣れた清色城を出て、隈之城に移つた父重聡の気持を思つた。そして重聡を、菩提寺である清色の寿昌寺ではなく、隈之城の大源寺を修復してそこに葬り、立派な墓碑を立てた。そして重聡の法号定祐に因んで大源寺を定祐寺と改称したのであつた。雪も

ひっそりと会葬した。ここならば雪も墓参りに来れる。雪は兄に心から感謝していた。

光は髪をおろして隈之城に止まり、死後は夫の隣で眠らせてくれるよう重朝に頼んでいた。現在もなお、隈之城大源寺跡には、重聡と妻や女たちの墓が残っていて、川内市によって管理されている。

雪は老衰して行く父を度々目にしていたので、格別取り乱し悲嘆に暮れるようなことはなかった。仏壇に形見となった刀の鍔を置いて、毎朝静かに手を合わせた。これは雪の嫁入りのとき父にせがんで太刀から外してもらったもので、透かし彫りに金の小さな家紋がはめ込んである。白磁の香炉に香を燻らせ、父の菩提を弔いながらも、内心、雪は自分の周囲の微妙な変化に心を痛めていたのである。

対立していた実久は出水に退いて、入来院氏が強大になってくると、それがまた忠良、貴久には脅威になって来たのだった。貴久の母寛は、実久の父忠興の妹であり、すなわち実久の叔母でもある。薩州家三代成久は、貴久、実久の共通の祖父であり、何のことはない今までの貴久、実久の死闘は従兄弟同志の争いなのであった。

そもそも川上、新納、樺山、北郷、伊集院などの諸豪族は全て島津氏の分家である。利害が相反したり、南北朝の複雑な経緯があったりで、団結はしていないがもともとルーツは同じなのである。本田氏は、関東から下向してきた当時からの島津の家臣ではあったが血族ではない。結局は滅ぼされている。蒲生氏、肝付氏のように鎌倉時代以前に荘官であったものや、相良氏、入来院氏のように、関東から地頭として下向してきたものとの間柄は、やはり水であって血ではない。明治まで存続した家系は、必ずや島津氏との婚姻関係を持ち、外戚となっていればこそだと言える。

重朝に痛めつけられていた実久は、重朝のあることないことを叔母の寛に書き送った。特に重朝の傲岸さを強調し、油断するなどの告げ口である。少々眉に唾をつけながらも、寛も三度に一度くらいは貴久に報告する。そうした姑の態度の変化が、亀丸城に時折戻る雪にはピリピリと来る。舅の忠良も、意識的に孫を母から引き離し始めていて、雪の帰城の際さえも十分な団欒の時は持てなかった。雪は父の死とともに、もはやこの家は入来院氏の助力が不要になったのだと感じて、一層の孤独感にさいなまれながら伊集院に戻るのだった。

重朝は、川内方面を平定した後、南に下って、かつて勝久によって与えられた郡山城を整備しその強化に努め始めた。まだまだ南薩は安定しているとは言えない。東の始良平松は伝来の領地でもあり、そこまでを連ねればまさに安定した勢力足りうるのだ。

しかし、これには貴久が神経を尖らせた。郡山は、伊集院に隣接していて、鹿児島との間にある要所である。喉元の刃になりかねない。渋谷氏はまたの名を山北の族とも言われていたように、八重山の入来院の北

に収まっていればよいのだと貴久は思っていた。僅か三年前に入来院氏に、実久の川内地方を可能な限り切り取れ、末代まで二心ないとは告げたものの、この時代の誓約は何の確約にもならないものだった。

渋谷氏五族は、入来院のほか東郷、祁答院の両氏がまだ健在であり、いずれも重朝の姉たちが嫁いでいた。しかし重朝より二十才以上も年上だったから、姉というよりは叔母といった感じであった。甥といっても重朝よりも年上の、豪の者で鳴らした祁答院重武には良重という嫡男がいた。重朝より十才年下であったが、麗朗闊達、豪胆でまさに薩摩の男らしい男であった。重朝は良重を弟のように可愛がっていた。祁答院氏は入来院氏の北、宮之城の川内川のほとりの景勝の地に、名城として聞こえた虎居城を築き、しっかりとした基盤がある上、帖佐方面も領有していて、一大勢力である。重朝は、この重武父子の頼みは何かとよく聞いてやり、助力を惜しまなかった。

忠良父子には、この渋谷氏の連帯も大変気になることであった。そろそろ何とかしなくてはと二人は感じ始めていた。

天文十二年、種子島に漂流したポルトガル船は、鉄砲を置き土産にした。そしてこれがその後の戦争を、大きく変えて行ったのだった。

花の散るとき

紫尾山の南側で祁答院氏と接し、阿久根で東郷氏、入来院氏と接する実久にとっては、渋谷氏は宿敵とも言える。抜け目のない実久は、重朝が渋谷氏を結託させて貴久に叛こうとしているという噂を流布させた。忠良父子もまたそれを否定せず、返って利用して重朝の勢力を削ぐことを考えていた。当時の重朝の勢力圏は貴久のそれと拮抗するほどにも強大になっていたのだ。

雪は驚き悲しんで、兄に急いで通報した。重朝に、謀叛の噂があり、それも忠良、貴久は信じてしまったようだ。重朝も驚愕して弁明の会見を急遽申し込んだのだが、貴久はもはや聞き入れようとはしなかった。それどころか出仕することを禁止する旨を伝えたのだった。重朝には、一族の勢力を確固たるものにしておく努力こそすれ、三州に覇をとるようななどという野望は全くなかったのだが。

天文十三年の夏のことであった。

「まあ、兄様に二心があるなんて、そんな噂がでたらめなこと、殿が一番ご存じじゃあありませんか。どうしてそのようなことをなさいますの」

実質の守護職を担い、紛争の解決などに多忙な貴久は、このところ留守がちである。父の死後、沈みがちな雪は、臥所を共にすることも少なくなっていたが、流石にこのときばかりは貴久の帰城を待って詰問した。

「いや、雪。お前には少しも情勢が分かっておらぬ。この戦国の代は

親の首を搔く者も いる時代じゃ。なんで兄が妹の婿を裏切ることがないなどと言えるのか。それよりも、こちらの内情を知らせたりしてはならぬぞ」

貴久はいつになく強硬であり、重朝との文通さえ禁じたのだった。

雪は、内心は貴久は本当は兄は冤罪であることを知っていると確信していた。兄が手の内を隠すような小細工など一切するような男ではないことを、一番知っているのは夫貴久である。これは入来院氏に戦を挑む口実なのだと言は、雪は正確に見極めた。竹を割ったようにさっぱりとしていて、しかも気立ての優しい兄が無性に哀れに思えた。

夫に対する失望が、生きることへの絶望にもなった。夏の暑さに食も細りがちだった雪は、静かに食を絶った。

唯一気掛かりな子供たちは、舅、姑の溺愛を受けている。その資質からして立派な大将になることは疑いないであろう。その成長ぶりを目にすることの出来ない口惜しさは拭えなかった。涙ぐみながら、縁側に出て、茜色に染まった夕焼け雲を眺め、幼い日々の思い出や、まだ夫の力が弱く、父や兄を頼みにしていた頃の亀丸城の、格式張らず和やかで賑やかな日々を思いを馳せた。

雪は、何事もないような顔で家臣の朝夕の挨拶にはきちんと対応するのだが、その後は奥に敷かれたままの臥所に横たわった。腰も曲がってきた夏にも、この所の居心地の悪さにぶつぶつこぼすとめにも、雪は固く食を絶ったことを他言しないように言いつけた。自分たちの運命を覚っていた彼女たちは、涙ながらに従った。一旦城が落ちれば、女と言えども血祭りに上げられていた当時のことである。城内の女たちはそれなりの覚悟と無常観を持っていた。

九月に入り、台風に襲われた南薩は、その後始末に一騒ぎであったが、皆が気づいたときは、雪はすでに起きることは出来なくなっていた。流石に貴久もそれを聞き駆けつけ見舞った。そしてこの半月足らずの間に俄にやつれ果てた雪を見て驚いた。

「どうしたのだ。あれほど子供たちの将来を楽しみにしていたのではないか。はやまるではない」

と励ましながら、粥を口に運んでやる。しかし微笑んで受ける雪にはもはや嚙下する力も失せていた。

「あの子たちをよろしゅうに。兄様のことも」

と言うのがやっとである。腕の中の雪に、重朝についての確約の出来ないことが、貴久の胸にも痛みを走らせた。

九月半ばの旧暦八月十五日の夕、ついに雪は帰らぬ人となった。庭前に何本も植えられた白芙蓉の花びらが一斉にはらはらと風に散っていった。

山北の斜陽

貴久は一字治城の麓近くの大田の地に雪の戒名「雪窓妙安大姉」にち

なんで「雪窓院」という尼寺を建立し、雪を手厚く葬った。夏、とめが髪を下ろしてそれを守った。

忠良は、雪のことを思うと胸が痛まなかった訳ではないが、薩隅の覇者となり、わが子貴久を大守にという願望の方が勝っていた。そして子供たちへの影響を考え、貴久や家臣一同に、雪及び入来院氏の思い出を一切語ることを禁じた。家臣にしても重朝を反逆者と位置付けた以上、同情の言葉ははばかれた。城内はしばらくは異様な気詰まりがあり、子供たちもその気配を察して悲しみを噛み殺していた。やがて無言で偲ぶことも不自然ではなくなり、雪は幻のような美しい思い出にと昇華していくのだった。

天文十四年（1545）の年明けとともに、貴久は気分を一新するため、居城を亀丸城より伊集院の一字治城に移した。子供たちも祖父母と別れ、父とともに移動した。そこにはまだそこはかかない雪の残り香を感じさせるものがあった。

貴久は夜になると、闇の中に一人目を閉じ、両手を広げて雪の気配を感じようと努め、そっと呼びかけるのだった。臥所に入っても、果して自分は父忠良の強烈な統一への願望に、ただ引きずられて来ただけなのだろうかと自問自答する。そして自分の内にある権勢欲を認めながらも、「この不幸な世を安定させ得るのは自分しか居らぬ。雪よ許せ。子供たちの為ぞ」と自ら気を奮い立たせるのだった。

翌日は、子供たちと共に雪の墓参りに出掛けた。生憎、雲は重くたれこめていたが、子供たちの足取りは軽かった。雪のうれしさの現れか粉雪がしきりに舞っていた。

同年三月十八日、島津忠広、北郷忠相は、伊集院に貴久を訪ねて、勝久の旧臣一同は大守に貴久を推薦することになったと伝えた。京都の近衛植家卿からは貴久に衣冠束帯を贈られた。ここに貴久は名実ともに守護となったのだった。

雪の死の報は重朝に衝撃を与えた。原因は謂われのない自分への中傷であり、その弁明を拒んだ貴久にあるのだと、怒りと口惜しさに身が震えた。直情で潔いことを身上としていた彼は、昔から忠良父子の間者を使つての奇襲などに、感心はしても見習う気は毛頭なかった。ましてや主体的な情報の操作などは考えても見なかったから、風評を取り上げ、自分を反逆者に仕立てた貴久を許せないと思った。

貴久が郡山を窺っているのを知った重朝は、同年八月、渋谷一族に加えて、蒲生、肝付本田の諸氏と謀り、郡山城に兵を挙げた。貴久は例の如く夜襲をかけたが、城兵はよく防ぎなかなか抜くことが出来なかった。しかし、今や守護として薩隅の中心となるべき貴久である。流れは貴久

に向いていた。彼は新納忠元やそのほかの諸將に増援を命じて攻めたてた。遂に郡山城は落城し、各氏はそれぞれ散り散りに別れて落ち延びていったのであった。

その後この連合軍は、天文十八年の肝付氏の加治木城、次いで天文二十三年の祁答院氏の岩剣城と大激戦の末、貴久に敗れては暫時後退を続けることとなる。岩剣城の合戦では、日本で最初に鉄砲が使われたといわれている。

その後、先ず蒲生氏が狙い撃ちされる。次いで祁答院氏が帖佐を追われる。菱刈氏も孤立する。そして蒲生範清は領土を追われ、祁答院氏を頼って虎居城にたどり着いた。祁答院良重は、虎居城の対岸松尾城を与え、厚く保護したのだった。

打ちひしがれた重朝は家督を嫡男の重嗣に譲り、隠居して後に市比野に移った。そして上之原宇都玄豊寺に帰依して、世俗を離れ引きこもった。忠良父子の壮絶とも言える権勢への執着には、とても対抗出来ないことを心底思い知らされた。和尚の「世の現象、人の五感は全て空」であるという説法を素直に納得した。時折訪れて来る妹の珠と昔語りや、田畑の作物の出来具合などの話をしては、虚しい思いを紛らわせる日々となった。

祁答院良重は、敗退はしたものの川内川の中流祁答院に依然相当な勢力を保っていた。これを滅ぼすのは容易なことではない。実久は娘の姉虎を良重に嫁がせていた。後から思えば、それを受け入れた良重は不用意であったと言えばこれ以上の不用意はなかったが、戦国時代の結婚は殆どが政略結婚であり、相互になにがしかの思惑があった上のものである。子まで成したものの、豪胆な夫の心は先ずは戦争、さもなくば狩に向かっている。側室の三人も、いずれも良重に夢中であり、独占欲の強い虎は侘しい日々であった。西の東郷氏と弟義虎の間には戦が絶えず、夫と弟との仲もこのところ険しい。かつて父から渋谷氏は宿敵であることを繰り返し聞かされていたこともあって、虎は自分の不満を意に介することのない夫に、密かに父の恨みを果たす機を窺っていたのだ。

永禄八年正月、暮れから紫尾山の狩に出掛けていた良重は、十五日間も山で過ごした。家臣たちは正月の挨拶に正装して山に登ったのだった。良重は帰城すると直ちに正月の宴を開いた。正月を迎えるすべての行事を自分一人に任せ、半月も山で好き勝手をして、帰ると労うこともなく直ちに宴会とは何事か。虎は夫に酒を勧め、酔って眠ったところを見計らって、良重を刺し殺した。

入来から来ていた十三才の小姓の村尾亀三は、隣室に控えていたが、ただならぬ気配につと立ち上がり襖を開いた。その惨状に事情を覚った亀三は、すかさず「御免」と屏風で夫人を押さえ、力いっぱい刺し通した。かくて夫人も屏風越しに刺殺されたのである。そしてここに祁答院家は断絶してしまったのだ。岩剣城の戦いの十二年後、永禄九年の正月

は良重四十一才のことであった。祁答院氏の地は入来院氏の保護のもとに入った。

この年、貴久は家督を三十三才の嫡男義久に譲っている。

永禄十二年（1568）八月、貴久、義久は北の大口城を猛攻した。相良義陽、菱刈隆秋は城を捨てて人吉に走り、両氏の勢力は急速に衰え、もはや回復は不可能であった。

十二月に入って、大守の父として自ら徳育に励み、後世へ教育の指針を残すことに勤めていた忠良は、七十七年の波瀾に満ちた生涯を加世田で閉じた。

翌永禄十三年秋、入来院重朝も病の床にあった。今は静かに写経や読経に勤める日々となっていた。ただ五年前の良重の不慮の死は惜しみても余りあった。事件後、重朝は良重の孫の福寿丸を秘かに呼び寄せ、寺内にかくまった。その福寿丸もいまや元服して重種と名乗り、重嗣の家臣に座を連ねている。

忠良の死の報は、重朝に胸の鉛が半ば溶けたような不思議な諦観をもたらしていた。敵も味方も、自分と一時代を画した多くは鬼籍に入ってしまったと思った。もはや渋谷氏に往年の隆盛を望むことは叶わないことも悟っていた。重朝は見舞いに来た重嗣に、これ以上の流血は無駄なことを諭した。重嗣も内心同じことを考えていたので、父の言葉に吹っ切れるものがあった。

翌年の元亀元年の正月、入来院重嗣は親族一同を集めて言った。

「我々は長い間島津氏と戦って来たが、今や一族は全く孤立してしまい、回復は叶わなくなってしまう。これ以上の戦は無益である。悉く領土を献上して島津の軍門に下ることにしたい」

一同無念の涙を滲ませたが、誰も反対する者は無かった。運勢の流れは人知の及ぶところではなかった。既に渋谷一族として唯一残った東郷重尚も同意していたのだった。

義久はその申し出を受入れ、重嗣に清色（入来）、重尚に東郷とそれぞれの旧領の一部を与えた。実に渋谷氏は関東より地頭として下向して以来三百二十三年を以て、ついに島津の家臣となったのだった。貴久は悪びれずに出向して来た重嗣に、若き日の重朝の面影を見出して、暫く感無量であった。

春になった。楠の若葉の匂いたつような緑を眺めながら、かつての紅顔の若武者重朝は静かに息を引き取った。六十歳ではあったが、端正なその表情は穏やかであった。一族の存続を確かめ得たし、降伏した相手は雪の息子たち、彼自身の甥なのである。

重嗣は島津氏を慮って、代々の菩提寺の寿昌寺ではなく逼塞していた上之原宇都玄豊寺にひっそりと埋葬し、墓は単なる墓標を石にしかただけの簡単なものを建てた。その石碑は維新後、廃仏毀釈で墓石以外は跡形も無くなった寿昌寺の、お石塔と呼ばれている入来院氏の墓地に移され

て、島津氏からの嫁たちの立派な墓石の影にひっそりと現存している。

重朝の訃報を内々に知った貴久も、胸の奥深くにあった棘がそっと抜けたことを覚り、全てを、義久に任せて加世田に引きこもった。

翌年の元龜二年六月、貴久は加世田でこの世を去った。五十八才。父忠良の死後、僅か二年半、重朝の死より一年しか経っていなかった。

エピローグ

島津氏の記録から殆ど入来院氏の記述、雪窓夫人の記述が消えて、その伝承も絶えた。旧記雑録巻四四文書番号2178に次の文書がある。

享祿四年辛卯

四月五日、入来院上総介 水引に於て戦死とあり、公室の敵歟、

六月四日、東郷左馬助重貞 百次にて戦死とあり亦公室の敵方歟、

此年、寺尾左兵衛重次 枯木か尾にて戦死とあり、此軍も敵方ならん

とある。寺尾氏は入来院初代定心の三男重経の子孫で筆頭の血族である。この記述では「これは渋谷氏の内紛で、戦死した男たちは雪窓夫人の敵ではないか」というのである。

しかし、この戦は入来院重聡と、薩州島津実久との死闘である。東郷左馬助重貞は、高城重貞であることは前述した。この年の五年前大永六年、貴久は勝久の養子として守護職を与えられたのに、その翌年、貴久は実久に鹿児島を追われ伊作に戻って、忠良とともに実久との戦端を開いていた。そして入来院重聡がその実久を相手に幾度も果敢に戦い、大切な身内を犠牲にしていたのだ。忠良、貴久が実久を加世田、伊集院に破り、鹿児島に入ることが出来たのは、この入来院氏の陰の功績によるということ、後世に一切伏せられていたことを物語っている。

重聡については、十二代守護忠治の書状旧記雑録巻四二文書番号2127、28その他にも見られるように身分を弾正少弼と書かれているが、何故か雪については弾正忠重聡の娘と重聡の位を下げて記述されている。このことも重朝を反逆者と位置づけてのことだろうか。

旧記雑録天正四年丙子八月に、義久の次の文があることが「入来院史」に記載されている。この一文が全ての救いと言えようか。

雪窓妙安大姉三十三回ことし八月十五日に相あたり侍りしは年季も是を限りなれば一人 かなしさ身にしみとをり時しもあれ秋やは人のわかるべきと云ひおきしいにしへも思ひ やられていとも露けき秋を追善に広濟和尚詩をつくり手向給ひし其韻字を取て試に一首 つら禰侍るものなり

月にちるははその秋はほともなく
雪に向はんまとの山風

義久

「雪に向かはん、窓の山風」と雪窓の名を詠み込んだ義久の母恋いの歌である。

白芙蓉あとがき

平成十年（1998）は、渋谷氏（東郷、祁答院、鶴田、入来院、高城）が相模の渋谷の荘よりはるばる薩摩に下向してから、七百五十年に当たった。この年の初夏に、筆者と仲間の呼びかけで、全国から渋谷一族と歴史愛好家が集まり、北薩の各氏の拠点を歴訪する一日を持った。

いまや各氏は裾野も広く、各地、各方面の第一線に活躍している。

当日の鹿児島短期大学学長三木靖氏の講演は、時間の関係で渋谷氏が関東を出発するころまでで終わってしまった。その後の歴史はこれから毎年聞かせて頂くことになった。

筆者の居住している入来町には、古くからの遺跡が多く、中世のたたずまいを残す武家屋敷群も現存している。近々国道も迂回するようになるので、歴史のお好きな方々の散策をお勧めしたい。